桂浜神社

桂浜神社の歴史は 8 世紀にまで遡ることができる。倉橋島の桂浜海岸のすぐ北側にあるこの神社は、日本最古の歌集にも詠まれており、明治天皇をはじめとする歴史上の著名な人物にも崇敬されてきた。呉市の発展に伴い、桂浜神社に祀られている神々は、移り変わりに合わせて変化し、神社の歴史は地域の歴史を反映している。

736 年に大石簑麻呂が詠んだ歌が、桂浜に建つ神社の初出である。大石簑麻呂は、新羅の国（紀元前 57～935）への外交使節団の旅の途中、倉橋島に上陸し、その景観の美しさに心を打たれたという。彼が詠んだ歌は、奈良時代（710～794）後期に編纂された日本最古の歌集『万葉集』に保存されている。

桂濱神社はもともと小さな神社で、航海の安全と豊漁をもたらす海の女性神である宗像三女神を祀っており、主に漁師を中心に信仰されていた。瀬戸内海での武運の高まりに伴い、参拝客の武運祈願が盛んになり、神社の連想も変化していった。1480 年、船乗りであり武士でもあった多賀谷弘重公が本殿を再建した際に、武運の神である八幡神をお祀りした。1982 年、本殿は国の重要文化財に指定された。

本堂は、鎌倉時代（1185～1333）の終焉から 1 世紀以上を経て建てられたものであるが、その簡素な建築が特徴的である。三間社流造と呼ばれる伝統的な神道建築様式で、左右非対称の

切妻屋根と 4 本の柱で正面を 3 等分しているのが特徴である。屋根は柿葺で、柱は四角ではなく円筒形をしており、神社建築としては異例のものである。拝殿は後に増設されたが、本殿よりも高い位置に建てられている。これは、そこに祀られている神々に不快感を与えるものと考えられていたため、本殿の柱は、隣の拝殿よりも少し高くするため高床式になっている。

神社の鳥居は、かつて船で訪れた多くの参拝客を迎えるために、海に面した浜辺に建てられた。呉の海軍基地としての重要性が高まるにつれ、桂濱神社は武運を祈願する場所として全国に知られるようになった。明治天皇や東郷平八郎（1848～1934）など、政府や軍部との関係が深い参拝客が訪れている。これらの訪問者の中には、絵馬と呼ばれる奉納碑を残している人もいる。この絵馬は、参拝者の祈りや願いを表したもので、多くの絵馬が社殿に飾られている。このお堂は、海とのつながりを大切にするために、呉の造船所の木材を使って建てられた。そのため、床板は船の側面のように湾曲して反り返っている。